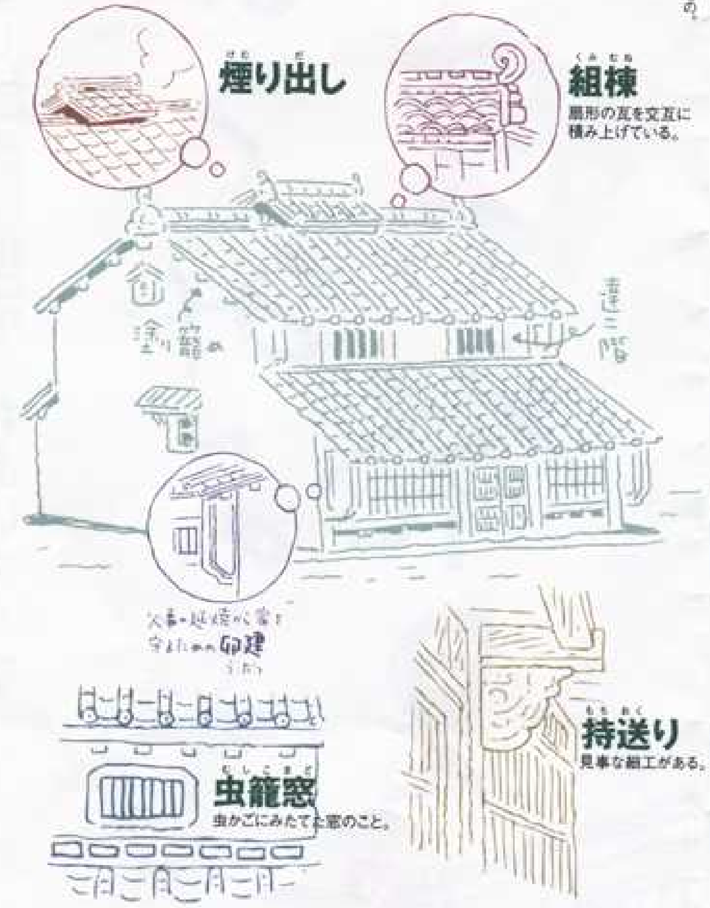
歩いてみよう 西発見。

旅人が行き交ったこの道は
はるかな時空を越え
今につながっている
昔の人々が暮らした「まち」を
訪ねることから
私たちの「まちさがし」の
旅ははじまる…

町屋（まちや）

草津の町屋

切り妻造りで、桟瓦葺き(さんがわらぶき)、格子構えの古い町屋がまだ多く残っている。草津では大火事が度々あったので、塗り籠めの家や「うだつ」のある家など防火に備えた町屋建てが特徴になっている。少しではあるが蔵造りの家も見ることができる。



観月山上の会飲に題す　頼山陽作

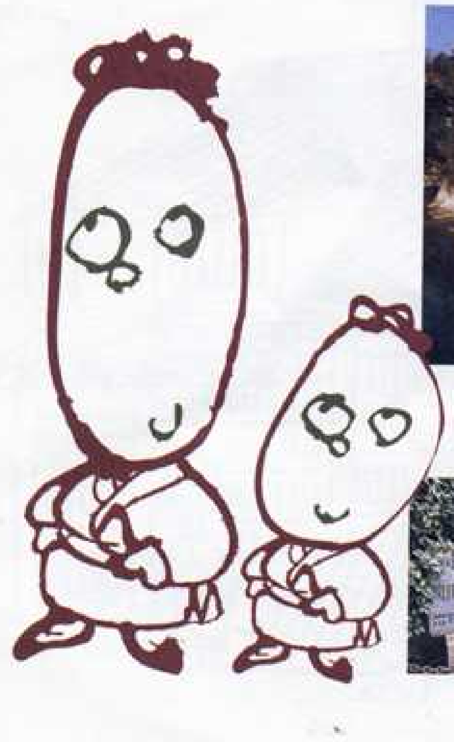
今夕　君と会して林間をのぼり
芝を焼き　酒を温めて　三更に至る
月は天心に懸かりて　銀波明らかなり
終夜　酔を尽くす　観月山

望月山上の　会飲に題す　田熊村　竹田作

松下　枯葉を蒐めて　酒を温め
高台　君に対して　相献酬す
月は天心に懸かりて　虫声爽やかなり
望月山上　憂を知らず

※この詩は井口の望月山で詠まれたもの。

小己斐明神



大石餅本店さん、長い間、おいしい餅をありがとう。

江戸時代の後期、文政元年創業といわれます。広島を訪れた明治天皇や伊藤博文などの政府高官も買い求めたとか。当主は六代目大石修さん。『何代にもわたってごひいきいただきましたが、時代の流れには逆らえず…』平成10年4月末日をもって、長い歴史に終止符が…。

さぞ大きかったであろう、「大門」。小泉本店に残る大門の金具。

草津には、広島城西の護りのための大門がありました。この大門に使われていたと思われる金具(蝶番にあたるもの)が、江戸時代後期、天保年間創業の造り酒屋「小泉本店」の中庭に残っています。金具は一個280kg(大人4〜5人分)の重さがあり、相当大きい門であったと想像できます。

小泉酒造の中庭に今も残る大門の金具

草津の小路

草津の古い町に入ると、小路がジグザグになっているところが見られます。ここに立つと、一度に遠くまで見通せない工夫(遠見遮断)や身を隠すことのできる家並みなど、中世の町を想像させる面白い造りを見ることができます。

受け継がれる茶の湯の心。上田宗箇流茶の湯

桃山時代に頂点に達して我が国独特の文化となった「茶の湯」は私達に素晴しい世界を残してくれました。

地方都市では数少ない茶道の家元が、西国街道沿いの古江東町にあります。

茶道上田宗箇流は、桃山を代表する武将茶人の一人であった「上田宗箇」を流祖とし、上田家代々によって、この広島の地に承け継がれてきたものです。今日に残された茶碗・茶杓など、また縮景園をはじめとする数々の宗箇の庭園にも、隅々まで力がみなぎっているのが感じられます。

茶室までつづく石道。

「わしらががんばらにゃあ。」舞いと花火が織りなす、古江神楽。

「昔、神楽は町の大イベントで、神楽を舞う若者はヒーローじゃったですよ」と保存会の兼重昭三さん。広島では数少ないおっとりとした調子の、十二神祇を舞う神楽の伝承活動を始めてからもう20年ほどになります。今では、公民館にも「子ども神楽倶楽部」ができ、若い継承者が育っています。先頭に立って頑張る兼重さんたちは、地域の素晴しい財産です。

古江神楽保存会　兼重昭三さん

今は、町のど真ん中。「別れの茶屋」

「別れの茶屋」は、草津の港へ通じる道と西国街道へ通じる道との分かれ目にあった「お休み処」。今はパン屋さんになっていますが、手作りのよもぎ餅やきび餅が、別れの茶屋の名残りをとどめています。

現在の別れの茶屋

昭和6年頃の別れの茶屋